



千葉茂
学校法人片柳学園 理事長

ちば・しげる氏

1955年生まれ
1983年 学校法人日本電子工学院(現片柳学園)入職
1994年 同副理事長
2003年 日本工学院専門学校・日本工学院八王子専門学校 学校長
2018年 学校法人片柳学園理事長

※学校法人片柳学園 設置校
東京工科大学
日本工学院専門学校
日本工学院八王子専門学校
日本工学院北海道専門学校

徹底した「実学主義」で、2万人が学ぶ学園に成長

「実学主義」によるデザインと工学の融合

本学園の創始者であり学園長の片柳 鴻は、空襲を受け不毛の地と化した東京蒲田の惨状を見て、若者の教育こそが日本の復興への道だと考え、1947年に芸術系の創美学園を創立しました。デザインとものづくりを重視する「実学教育」をモットーに、生活のための技術教育を展開。1953年のテレビ本放送開始に合わせ日本テレビ技術学校を設立し、工学分野に進出します。当時のテレビ技術開発の最先端で活躍していた技術者を講師に招聘し、教育環境や設備を飛躍的に充実させました。本学園の理念「理想的教育は理想的環境から」がこの頃までに確立し、現代まで継承されています。1966年には、いち早くコンピュータ時代の到来を意識し、日本初といえる電子計算機の本格的な教育を始めました。

1976年に専修学校制度が導入され、校名を日本工学院専門学校に改称し、デザインと工学が融合する専門学校となっていきます。1982年には日本工学院北海道専門学校を開校。続き1986年には4年制大学の東京工科大学を開学し、創立40周年を迎えた1987年には日本工学院八王子専門学校を開校しました。

大学では、専門学校が担う中堅たる技術者の育成から、それを管理する上級者の育成を目指しました。今の専門職大学に先駆けること30年前に、教員の56%は企業出身者、片柳学園イズムの「実学主義」を掲げ、既存の大学とは違った実践的な大学教育を目指したのです。工学部1学部としてスタートし、いち早くメディアの可能性に注目し、1999年に日本初のメディア学部を設置したことで志願者が一挙に拡大しました。その後も、工学部を発展的に解消したバイオナクス学部(現在応用生物学部)、コンピュータサイエンス学部、デザイン学部と医療保健学部を設置し、2015年には工学部を再び設置しました。これらの学部が時代のニーズと合致し、6学部、学生数8000人近い規模の大学へと成長しました。

創立50周年となる1997年には、法人名を片柳学園に

改称しました。現在、3つの専門学校と1大学を合わせた4校で2万人近い学生が学び、これまでに25万人を超える卒業生を輩出してきました。

カレッジ制とコーオプ教育

専門学校も大学も一貫した実学教育で、プロの現場と同レベルの機材を用意し、一流の講師陣による教育が特徴です。例えばCGでは数多くのディズニー映画のCGを手掛けたクリエイター、糸数弘樹氏から学ぶことができます。競合校との違いは、資格を取るだけでは、本当に社会で求められる人材にはなれないと考え、ものづくりと企業連携のプロジェクト型教育に徹底的に時間を割く教育方法です。非常に多くの企業から学園の教育にご賛同頂いています。

さらに、学園創立60周年を迎えた2007年には、蒲田校と八王子校の専門学校を横断する「カレッジ制」をスタートしました。2つの専門学校にある39学科を、外から見て一目で分かり、それぞれの専門性を活かせるような7つの学群に分けました。クリエイターズ、デザイン、ミュージック、IT、テクノロジー、医療・保育、スポーツの7つのカレッジです。そしてカレッジ個々の学びだけでなく、複数のカレッジと一緒に学ぶ形を作り、社会に出てから、専門家が集まり協働するものづくりの経験を、学内でできるようにしました。

また大学では、2015年に新設した工学部で「コーオプ教育プログラム」を行っています。理事長に就任して1年あまり、軽部征夫学長と情報共有しながら、大学と専門学校の将来について、率直に意見交換しています。コーオプ教育も、学長とアメリカに視察に行き、工学部の280名全員を、2カ月間有給のコーオプ実習(長期就業経験)に派遣することにしました。大学が1年間の事前教育と事後教育を含む教育プログラムを提供する「大学プログラム型」を採用し、コーオプ実習のために、2カ月間のギャップイヤーも導入しています。本プログラムは文部科学省「大学教育再生加速プログラム」に採択されたほか、「大学等におけるインターンシップ表彰」において優秀賞を受賞しました。

「教えない学校」を目指して

2017年に学園創立70周年を迎え、2030年に向けた中長期計画を今まさに策定しているところです。専門学校は大体10年スパンで物事を考えます。以前のように高い機材を購入して使い方を教える教育ではなく、機材を使って何を作るべきかまで考えられる人材を育てます。そのために3・4年制の学科の学生を今の全出願者の約30%からもっと増やしたいと思います。さらに、専門学校や高専、短大からも、最終的には学位を目指せる道が広がっている形にすべきだと思っていて、本校では、本学だけでなく他大学への編入学にも手厚いサポート体制を敷いています。

もう一つ、機材の使い方の教育から、それを使って新しい技術をどんどん作ってみる教育に10年かけて転換していきます。アメリカの大学を視察すると、授業は徹底的にPBL、教員の要件は、ICTの高い専門知識を持ち、レクチャーが上手で、3つの完成品があることと、5人以上の協働作業で成果を出していることでした。これからはこんな人達が教育を担っていく時代になるのだと感じました。

我々はずいぶん教えることを中心に考えがちですが、これからはいわば「教えない学校」になっていかないとはいけません。学んだことが強みなのではなくて、学び続けた生活が強みなのです。それには教員のマインドチェンジと、教員自身も学び続けることが大切です。

大学で策定中の中長期計画「Evolution2030」も、ポイントは能動的な学びへの転換です。変わらなければ生き残れないので、先進教育支援センターを作り、教育の専門家が教員のトレーニングを行う予定です。

最後に、本学園はこれから、ソサエティ5.0の中で活躍できる人材を育てようとしています。それには、自ら学び続けること、協働作業ができること、多様な人達と仕事をしていくこと。この3つをキーワードに、我々独自の仕組みを社会に発信していくことが、これからのチャレンジになっていくでしょう。

